

○ 美術館・展示室（昼）

ゆっくりと歩く女性の足元。

女性の足が止まる。

女性の後ろ姿、その向こうに、後ろ姿の女性の白い彫像。

ゆっくりと彫像に近づいていく女性。

彫像の手前で立ち止まり、さらに彫像の周りを歩き、正面から彫像を見上げる編集者・橋透子(32)。

少し俯き加減の彫像の顔。

彫像にしばし見惚れている透子の顔。

と、鞆の中の携帯に着信あり。

携帯を取り出してメールを読む。

携帯を仕舞い、手帳を取り出す。

『諦念——檜垣成志』の作品プレート。

それを見ながら手帳に書き写している。

手帳を鞆に仕舞い、静かに、でも少し足早に立ち去る透子。

○ 檜垣のアトリエ（日替わり・夜）

テーブルに置かれた原稿。

表紙に『僕の愛しい人だから』。

檜垣「(原稿を手に取りながら)『僕の愛しい人だから』?」

透子「ええ」

アトリエの一角に置かれたテーブルに向かい合わせに座っている大学講師兼彫刻家・檜垣(35)と透子。

檜垣「こんなロマンチックなタイトルに僕の作品を?」

透子「ええ」

出されたコーヒーを飲む透子。

その所作に目が留まる檜垣。

テーブルに置いた作品ファイルに手を伸ばしながら、

檜垣「あるかな……そんな作品……」

透子「あの……探して頂く必要はないんですけど」

檜垣「え?」

透子「実は、檜垣さんに新たに創って頂きました

いんです」

檜垣「でも、僕は注文を受けて作品を創るよ
うな仕事はしていないんですが……」

透子「ええ、そのことは知っております……」

でも、今回はどうしても創って頂きたくて
お願いに参りました」

檜垣「折角ですが、やはりお断り——（言いか
ける）」

透子「（檜垣の言葉にかぶせるように）お金で
すか？」

檜垣「え？」

透子「——断る理由」

檜垣「——」

透子「出来上がった作品にお金が支払われる
のはいいけれど、お金をもらって創るのは
嫌だということですか……？ お金が絡めば、
どうしても何かしら制約が出てくる。創り
たいと思うものを創れなくなってしまう—
—からですか？」

檜垣「ええ、そうです。そこまでわかっていら

つしやるなら、他を当たって下さい（立ち上がるうとする）」

透子「（檜垣の目をひたりと見据えて）檜垣さんの作品、何点か拝見しました」

テーブルに檜垣の作品のポストカードを並べる透子。

座りなおす檜垣。

透子「どの作品も……何て言うか……」『ああ、こういう彫刻の作品をわたしは見たかったんだなあ……』と考える作品でした。彫刻の世界に素人のわたしが、こんなこと言っても説得力がないことは十分わかっていましたけど……」

檜垣「いや……そう言ってもらえるのは、作り手にとって嬉しいし、励まされます」

透子「せっかく、こんなに素晴らしい作品を創れる才能があるのに、作品が限られた人の目にしか触れないのでは勿体ないです。

檜垣さんの作品、もっと多くの人に見てもらってもいいんじゃないでしょうか？……

いえ、見てもらいたいと思いました」

檜垣「――」

透子「確かに、今回お願いする作品は、本の中である程度イメージが出来上がっているの
で全く自由に創れるというわけではなく、
制約がありますが、そのイメージを基にし
て檜垣さんのアイデアを加えていただくこ
とは十分可能です。というより、是非そう
していただきたいと思っております。たかが
装丁のために……とお思いいなるのはわか
ります。でも、本って、まず目に入るのは装
丁です。わざわざ実物の作品を持ち出さな
くても、より多くの人に檜垣さんの作品を
知ってもらえることができるいい機会ではな
いでしょうか。作品は人の目に触れてこそ
のものだと思っております」

檜垣「……ありがとう。たとえお世辞でもそ
う言ってもらえると嬉しいものです」

透子「お世辞なんかじゃありません。本当に
そう思っています」

檜垣「橘さんは、本当に僕を買ってくれて
いるんですね。でも、僕の作品をあなたのよ
うに評価してくれる人はそれほど多くは
なかった——それが僕の作品に対する反響
です」

透子「それで、大学の講師を？」

檜垣「ええ。この世界、好きな道で食べてい
ける人間は、ほんの一握りですから」

透子「でも、彫刻が嫌になったわけではない
んですよね？」

檜垣「ええ……」

透子「それでしたら、とにかく一度この原稿
を読んで、一晩だけでも考えていただけま
せんでしょうか？」

少し間。

檜垣「——わかりました」

透子「（一礼して）ありがとうございます」

ポストカードを鞆に仕舞い立ち上がる透
子。

透子「では、今日はこれで失礼します。ご都合

のよろしいときにお電話ください。お返事を伺いにまた参りますから」

立ち去る透子。

見送る檜垣。

テーブルに置かれた原稿を手に取る檜垣。頁をめくり読み始める。

○ 出版社・オフィス（夜）

入ってくる透子。

自分の席にぼんやりと座る。

○ （回想）美術館・展示室

展示室の中央に立つ白い彫像の後ろ姿。正面から見たその顔。

○ 出版社・オフィス（夜）

窓の外を見ている透子の横顔。

○ 檜垣のアトリエ（深夜）

原稿を読む檜垣の横顔。

原稿を読み終わり、テーブルに置く。
スケッチブックにデッサンを描き始める。

○ 同（時間経過・明け方）

庭に面した窓を開けコーヒーを飲む檜垣。
テーブルのスケッチブックに早朝の光が
差し込んでいる。

○ 出版社・オフィス（朝）

コーヒーを入れている透子。
デスクの電話が鳴る。
同僚が「橘さん、お電話です」と声をかけ
る。

デスクに戻り、受話器を取る透子。

透子「お電話替わりました。橘です」

○ 檜垣のアトリエ

檜垣「おはようございます。檜垣です」

○ 透子

透子「！おはようございます。昨日はお時間を作っていただき、どうも有難うございました」

○ 檜垣

檜垣「いえ、こちらこそ……。実はもう一度こちらにお越しただけなにかと思つて、お電話したのですが……」

○ 透子

透子「！そうですか……。では、今から伺います」

檜垣「申し訳ないんですが、これから出かけてしまうので、できれば午後四時以降にどうでしょうか？」

透子「ええ。では午後四時にそちらへ伺います」

檜垣「お待ちしております」

○ 道（夕方）

歩いている透子。
空を見上げると、灰色の雲が広がっている。

早足で歩き始める。

地面にポツポツと雨が落ちる。

少し先の酒屋の赤い軒先に雨宿りをする。

携帯が鳴り、電話に出る。

透子「はい、橘です」

○ 檜垣のアトリエ

庭に面した窓を開け雨を眺めている檜垣。

檜垣「檜垣です。今、どの辺ですか？」

○ 透子

透子「近くまで来ているんですけど、雨に降られてしまつて……遅れてしまい申し訳ありません」

○ 檜垣

檜垣「傘をお持ちしますよ。どこで雨宿りを？」

○ 透子

透子「いえ、大丈夫です。もう少しすれば小降りになりそうですから」

○ 道

通りの向こうから傘をさして走ってくる
檜垣。

○ 酒屋の軒下

透子「！」

檜垣と目が合い、お辞儀をする。
傘をさして歩いてくる檜垣。

檜垣「どうぞ（と傘を差し出す）」

透子「（一礼して）わざわざすみません」

檜垣「いや……（赤い屋根を見上げて）ここは
雨宿りをするのにいいでしょう？僕も時々
するんです」

透子が傘をさすのを待ってから歩き始める檜垣。

檜垣の少し後ろをついて歩く透子。

○ 川沿いの道

歩道のない、車一台が通れる程度の道。

川面をうつ雨の音。

前を歩く檜垣の背中。

檜垣の少し後ろをついて歩く透子。

○ 檜垣の家・門の外

家の少し手前で雨が止み傘を閉じる二人。

檜垣が門へと続く階段（数段）を上り門

を開ける。

あとについて上る透子。

透子「！……」

透子の視線の先に薔薇の咲き誇る庭が広がる。

○ 同・庭

薔薇に惹きつけられるようにして中に入る透子。

ピンクの薔薇の前で立ち止まる。

透子の斜め後ろに立つ檜垣。

檜垣「これはダマスクローズ」

一瞬振り向く透子。

檜垣「クレオパトラに愛された薔薇と言われている。香りがいいんです」

薔薇に顔を近づけ香りをかぐ透子。

透子「ほんと、いい香り」

檜垣「(指差しながら)その奥にあるのがアイスバーグ。別名、白雪姫」

玄関まで続く道を歩きながら、薔薇(ブラックバツカラ、ニコル、ジュリア、サンフレアーなど)の名前を教えていく檜垣。

玄関前の紫色の薔薇の前に立つ透子。

檜垣「これは、ブルームーン」

隣りに立つ檜垣の顔をそっと見上げるも、あわてて目を逸らす透子。

透子「これ全部、檜垣さんが手入れを？」

檜垣「ええ……と言いたいところだけど、実はこの家は以前両親が住んでいましたね。」

母が薔薇を好きで、いろいろ育てていたんです」

透子「そうなんですか……。それで、ご両親は今どちらに？」

檜垣「五年前に父が定年したのを機に伊豆の方に引っ越しましてね。今は姉夫婦と暮らしています。それで僕がこの家に入ったんです。さ、どうぞ（ドアを開けて招き入れる）」

透子「（一礼して中に入る）」

○ 同・一階アトリエ

アトリエの一角に置かれたテーブルについている透子。

檜垣「どうぞ（と、透子の前にコーヒークップを置く）」

透子「（一礼して）有難うございます」

向かいの席に座る檜垣。

檜垣「この間は……。久しぶりに痛いところを突かれました」

透子「(一礼して)すみません。出過ぎたことを言って……」

檜垣「いえ、いいんです。橘さんのおっしゃったことは、まさに的を射ていましたから。確かに僕はお金が絡んだ仕事はしない主義を通してきました。……自分が創りたいと思うものを、妥協なく創りたいと思つていましたから。でもここ数年、創りたいものを創っているはずなのに、以前のように『これをどうしても創りたい』という熱意が薄れてきて、作品と真摯に向かい合えなくなつていたんです」

透子「……」

檜垣「でも、橘さんのおかげで、この原稿を読み、久しぶりに体の中から、こういうのを創りたいって気持ちがあふれてきて、夢中になつてデッサンを描いていました。だから、謝らなければいけないのは僕の方なんです。昨日はあなたに失礼な態度をとってしまったすみませんでした(一礼する)」

透子「いえ……」

スケッチブックを開き、透子の前に差し出す檜垣。

手に取る透子。

透子「！……（スケッチブックに見入る）」

少し間。

檜垣「どうですか……？」

透子「わたしが想像していた通り……いえ、想像以上にすごくいいです」

檜垣「よかった……」

透子「では、これを創っていただけなんですよね？」

檜垣「ええ」

透子「有難うございます」

スケッチブックを閉じて檜垣に渡す透子。

檜垣「ところで……これからまだ何か予定が
おありですか？」

透子「え？」

檜垣「少し早いけど……お時間があれば夕食
でも？」

透子「ありがとうございます。でも、折角ですが——（言いかけて）」

檜垣「（畳みかけるように）近くに手頃な洋食屋があるんです。もしよかったら、一緒にどうですか？」

透子「……はい」

○ 洋食店・表（夕方）

閑静な住宅街に佇む小さな隠れ家のような洋食店。

赤茶けたレンガ造りの壁が深緑色の蔦に覆われている。

並んで歩いてくる二人。

檜垣「ここは近所の人しか知らない、こぢんまりとした店だけど、シェフは長年イタリヤに住んでいたご主人だから、料理はなかなか美味しいんです」

ドアを開けて透子の中へ通す。

○ 同・店内

暖色系の淡い照明の店内。

向かい合わせに座っている二人。

食事が終わりがける頃。

透子「ひとつ聞いていいですか？」

檜垣「どうぞ」

透子「昨日、檜垣さん、『この世界、好きな道で食べていける人間は、ほんの一握りだ』っておっしゃってましたけど……」

檜垣「ええ」

透子「檜垣さんは、大学講師をやりながら彫刻を続けていらっしゃるんですね」

檜垣「続けているなんて言えるかどうか……」

透子「でも、ほら、好きな道とは全く別の道を選ぶ場合もあるでしょう？美大や音大を出て、全く関係のない職種の会社で働くとか。そんな中で檜垣さんは美大で講師をして好きな彫刻の道から完全に離れてはいない……」

檜垣「……」

透子「どうして、そういう道を選んだのかな

あつて……」

檜垣「選んだなんて……そんな偉そうなことは言えませんよ。大学卒業する時に僕もだいぶ悩みました。で、祖父に相談したことがあつたんです。祖父は絵描きにはならなかつたけど、小さい頃から僕に絵を教えてくださいましてね。その祖父が言つたんです。

『あきらめながら、貫き通せ』って」

透子「あきらめながら、貫き通せ……？」

檜垣「そう。『多くのものをあきらめながら、これだ、つて思うものを貫き通せ』つて。その祖父の言葉で気づいたんです。彫刻は僕にとつて少なくとも「あきらめる」側のものにできないな、つて……。それで、大学に残ることにしたんです。——でも、だからといつて彫刻がこれだ、つて思うものになつてゐるわけじゃない。いまだにあがいてゐるんです」

透子「——」

檜垣「でも、昨日は久しぶりに光が少し見え

てきた気がします」

透子「？」

檜垣「橘さんのおかげです」

透子「（首を振る）」

○ 洋食屋・表（夜）

檜垣と透子が連れ立って店から出てくる。

透子「今日は有難うございました。いいお返事が頂けたうえに、夕食までご馳走になって……」

檜垣「僕の方こそ、楽しい時間を過ごさせてもらいました。よかったら、また今度一緒に緒してください」

透子「ええ、喜んで。でも、今度はわたしにご馳走させてください。檜垣さんにはこれからお世話になりますから」

一瞬、ぎこちない笑みを浮かべる檜垣。

○ 出版社・オフィス（昼）

デスクで仕事をしている透子。

ファイルから檜垣の作品のポストカードが出てくる。

パソコン横のボードにカードを貼り、しばし見つめる。

携帯を手取る。

【檜垣成志】の文字。

通話ボタンを押せずに閉じる。

溜め息をつく透子。

○ 檜垣のアトリエ（昼）

制作の手を止め、コーヒーを淹れる檜垣。

テーブルの携帯を取る。

【橘 透子】の文字。

通話ボタンを押せずに閉じる。

しばらく考え込んだのち、何か思いついた顔をする檜垣。

○ 出版社・表（夜）

出先から帰ってくる透子。

中に入ろうとした時、

檜垣の声「橘さん……」

振り向く透子。

道沿いに停めた車から檜垣が降りて走って来る。

透子「(二礼して)夕方お電話いただいたようなので、先程アトリエにお電話したんですけど、お留守だったので……」

檜垣「わざわざ、すみません」

透子「何か急用でも……?」

檜垣「いや……、近くまで来たものだから、夕食でもどうかかな、と思いまして」

透子「夕食?」

檜垣「ええ。もうお済みですか?」

透子「いえ、まだです」

檜垣「じゃあ、よかったら……」

透子の返事を待たず、車に向かい助手席のドアを開けて待っている檜垣。

少し躊躇してから車に向かい乗り込む透子。

ドアを閉め、運転席にまわり乗り込む檜

垣。
走り出す車。

○ 小料理屋・表

隠れ家のような小さな門構え。
門から玄關まで石畳が続き、敷居が高そ
うな雰囲気。
檜垣のあとを透子がついて入っていく。

○ 同・座敷

仲居が下がる。

透子「素敵なお店ですね」

檜垣「よかった。喜んでもらえて」

透子「よくいらつしやるんですか？」

檜垣「いや、大学関係の会合で二、三回来ただ
けです。この間の洋食屋みたいに気の置け
ない店もいいけれど、こういうお店もいい
かなと思って……」

間。

檜垣「それより……（一瞬目を逸らして言い

淀む) さっきのは嘘です」

透子「?……」

檜垣「近くまで来たついでじゃなくて……最初から橘さんを誘うつもりでした。恥ずかしいんだけど……断られたときのための逃げ道っていうのかな」

視線を膝の上に落とす透子。
間。

透子「(檜垣の目を見て) 実はわたしも……」

檜垣「ん?」

透子「檜垣さんから連絡が来るのを待っていました。知り合ったばかりだったけど、あの夜は久しぶりに楽しかったから」

檜垣「!……」

少し間。

小さく吹き出して笑い合う二人。

ひとしきり笑い、

檜垣「(居ずまいを整え改まった口調で) 二週間も待たせて、すみませんでした(と頭を下げる)。本当はもっと早く連絡しようと思

ったんですけど……橘さんも僕と同じ気持ちかどうか自信がなかったから」

透子「……」

仲居の声「(障子際で) 失礼します」

○ 駐車場・車内

助手席に座っている透子。

運転席に乗り込む檜垣。

キーを回そうとした手を止めて、

檜垣「(フロントガラスの向こうに目をやった

まま) 見せたいものがあるんだけど……」

透子「?……」

檜垣「(透子に顔を向けて) いや、一緒に見た
いものがあるんだ」

腕時計にちらりと目をやる透子。十時を
回っている。

透子「今から?」

檜垣「(うなずく)」

と、駐車場に一台の車が入ってきて、その
ヘッドライトが車内を一瞬照らし出す。

檜垣の目の色に思わずうなずいてしまい
そうになり、あわてて首を横に振る透子。

透子「ごめんなさい。明日は朝早いから」

檜垣「そうですね……こんな時間からじゃ
視線を前に戻し、横目で檜垣をちらりと
見る透子。

ふっと笑みを浮かべる。

透子「やっぱり見せてください」

檜垣「え？」

透子「一緒に見たいものを」

檜垣「(うなずく)」

○ 海岸沿いの道(夜明け)

停めた車から檜垣と透子が降りてくる。

檜垣「よかった……間に合って」

透子「?……」

海に面した遊歩道のベンチに座る二人。

刻一刻と変わる空の色。

水平線から太陽が昇り始める。

透子「!……」

透子の横顔を見る檜垣。

○ **走る車・車内（早朝）**

早朝の光が照らしている。
時折、目を合わせては逸らす二人。

○ **透子の家・表**

車から降りる透子。
檜垣の車が角を曲がって見えなくなるま
で見送る。

○ **檜垣の家・アトリエ（朝）**

デッサンを見ながら、彫像を創っている
檜垣。
ふっと手を止める。

○ **出版社・オフィス**

デスクでパソコンに向かっている透子。
パソコン横のボードに檜垣の作品のポス
トカードが貼ってある。

手を止め、カードに目をやる透子。

携帯が鳴る。

携帯に出る透子。

透子「はい、橘です」

檜垣（声）「……檜垣です。おはようございます」

透子「！おはようございます。昨日はごちそうさまでした。（声が段々小さくなる）それから今朝も……有難うございました」

○ 檜垣の家・アトリエ

椅子に座って透子を描いたデッサン画に手を加えながら、

檜垣「いえ、こちらこそ……。仕事があるのに徹夜させてしまつてすみません。今夜はよく眠ってください。それで——もしよかつたら、明日また会えませんか？お仕事が忙しくなければ」

○ 透子

透子「……ええ、喜んで」

○ 檜垣

檜垣「じゃ…また明日」

○ 洋食屋・表（日替り・夜）

店から檜垣と透子が出てくる。

○ 道

満月を少し過ぎた月が出ている。

並んで歩いている二人。

透子「ごちそう様でした。おとといご馳走に

なったばかりなのにすみません」

檜垣「いや……」

透子「……」

檜垣「……」

ぎこちない間。

何か考え込んでいる表情の透子。

そんな透子の横顔をちらりと見る檜垣。

檜垣「どうかしましたか？」

透子「(我に返って)いえ、どうしてですか？」

檜垣「何か考え込んでいるようだから……」

透子「……」

間。

不意に立ち止まる透子。

合わせて立ち止まる檜垣。

透子「檜垣さん」

檜垣「はい？」

透子「こんなこと言うの、自分でもどうかしていると思うんですけど……」

檜垣「?……」

透子「私と結婚して下さい！」

檜垣「!」

少し間。

不安げな表情で檜垣を見ている透子。

と、不意に透子を抱き上げてクルクルと

回りだす檜垣。

透子「!……ちよつと……」

透子、抵抗するものの、次第に笑い声に変わる。

不意に動きを止める檜垣。

透子「?……」

檜垣「(透子の目を見つめて) 僕も君と結婚したい」

笑みが広がる透子。

どちらからともなく顔を近づけキスを交わす二人。

○ 教会・中(昼)

教会の後ろの扉が開く。

父・靖夫の腕に手を添えて歩き出す透子の後ろ姿。

祭壇前で見守る檜垣。

最前列の席で見守る母・湘子と妹・砂季(25)。

祭壇に近づいてくる透子と靖夫。

○ 教会・表

扉が開く。

外へ出てくる檜垣と透子。

階段脇に二人を祝福する親族・友人たち。
階段を下りてくる檜垣と透子。
階段下に透子の父・靖夫、母・湘子、妹・
砂季、檜垣の家族。

○ 写真

結婚式の時の檜垣と透子が写っている。

○ 出版社・オフィス（昼）

その写真は透子のデスク（電話のそば）
に置かれている。

デスクで電話に出ている透子。

透子「……では、明日の午後五時に伺います
ので、宜しくお願い致します」

電話を切る。

女性（後輩）がそばに来て一枚の紙を透
子に渡す。

女性「橘さん、この絵の作者、わかりませ
んか？」

透子「（紙を受け取り）うーん、どこかで見た

「ような気もするけど……どうして？」

女性「担当の藤村先生に、今度の本の装丁に、
こういうのを使ってほしいって頼まれたん
です」

透子「そう……。じゃあ、私も探してみるわ」

女性「（一礼して）お願いします」

女性、立ち去る。

絵を見つめる透子。

透子「！……（何か思い出した表情）」

○ 透子の実家・表（夕方）

「橘」の表札。

玄関のチャイムを押す透子。

中から反応なし。

仕方なく自分で鍵を開け、中に入る。

○ 同・玄関・中

「ただいま」と言いながら中に入る透子。

玄関マットの上に父と母のスリッパが並
んでいる。

「なんだあ……二人して出かけているのかあ……」と呟きながら中へ上がっていく。

○ 同・砂季の部屋

ドアは開いている。
中に入る透子。

ベッドや机の上など綺麗に整頓されている。

ふっと立ち止まる透子。

出窓に白い百合（カサブランカ）が花瓶に飾られている。

百合に目を留めてから、本棚に向かう。

「砂季……ちよつと見せてね」と呟きながら、本棚から画集を手取る透子。

パラパラと捲っては後輩に頼まれた絵を探す。

画集を取り出しては元に戻すのを何度か繰り返す。

そのうち、隅に隠れるようにして仕舞わ

れているスケッチブックに手が止まる。
手に取り、パラパラと捲る。

と、その中に、檜垣を描いたと思われる
デッサン画。

透子「！（サッと顔色が変わる）……成志さん
がどうしてここに？」

パタンとスケッチブックを閉じる。

呆然と、どこか血の気の引いた顔の透子。

大きく息を吸い目を閉じる。

再びスケッチブックを開く。

檜垣を描いたデッサン画。

その右下に『2003年4月14日 西

洋彫刻史の講義にて』との砂季の文字。

透子「（眩く）私よりも前に、砂季は成志さん
に会っていたってこと……？」

本棚にスケッチブックを仕舞い、あわて
て部屋を出る透子。

○ 同・表

家の車に飛び乗り、アクセルを踏む透子。

○ 走る車

運転している透子。
心ここにあらずといった様子。

○ (回想・結婚式) 教会・表(昼)

階段を下りてくる檜垣と透子。
階段下で透子の父・靖夫、母・湘子、砂季
に挨拶をする二人。

砂季「姉を宜しくお願いします(と一礼する)」

○ 走る車

フロントガラスに雨が落ちてくる。
ワイパーで拭う。
運転している透子。
心ここにあらずといった様子。

○ 美術館・裏口・表

「○○美術館従業員用出入口」の看板。
透子の車が停まる。

○ 車内

車を停める透子。

出入口付近を見渡す。

ダッシュボードの時計に目をやる。まもなく六時半になろうとしている。

シートにぐったりと体を沈める。

間。

窓ガラスをコツコツと叩く音。

シートからハッと身を起こす透子。

窓の外に砂季が微笑して立っているのが見える。

○ 走る車

砂季「どうしたの？お姉ちゃんが迎えに来てくれるなんて……」

透子「今日は成志さんの帰りが遅いから、実家でごちそうになろうかなあと思ってたんだけど、お父さんもお母さんも出かけたみたいでいなかったのよ」

砂季「今日は二人でクラシック・コンサート
に行くって言ってたわよ」

透子「そうなの……。で、砂季は何が食べた
い？」

砂季「う〜ん……。あ、そうだ。この先においし
いフレンチレストランがあるわ。この間職
場の人と行ったんだけど、お店の雰囲気も
いいし、美味しかったし……。そこにしよ
うよっ」

透子「いいわよ」

砂季「そう、今度ね、カミーユ・クロードの
企画展やることになったの」

透子「カミーユ・クロード？」

砂季「うん。ロダンの愛弟子だったフランス
の女性彫刻家なんだけど、日本ではまだ、
あまり知られていないのよ。お義兄さんは
もちろん知ってるでしょうけど」

透子「！……（砂季の顔をちらりと見る）」

砂季「（無邪気に）お姉ちゃんが彫刻家と結婚
したと思ったら、彫刻家の企画展だなんて

……何か不思議な縁よね……」

透子「！……（前を向いたまま）」

× × ×

〈フラッシュ・回想〉

スケッチブックの中の檜垣。

教会の階段下で檜垣に「姉を宜しくお願

いします」と頭を下げた砂季。

× × ×

ハッと我に返る透子。

と、車の前に、突然トラックがウインカ

ーを出すのと同時に割り込んでくる。

透子「！」

急ブレーキの音。

車体の衝突音。

一瞬にして真っ暗になる。

○ 事故後の車内

六月下旬の設定なので午後七時近くでも、

まだ空は明るい。

頭から血を流して苦しげな表情の透子。

まだ息がある様子。
ぐったりと窓に頭を持たせかけ穏やかな
表情の砂季。息絶えている。
砂季の顔に焦点を当てて……

○ 大学構内・教室（昼）

座席につき授業の準備をする大学生の砂
季。

窓の外に八重桜が見える。

テロップ『三年前』

教壇に上がる講師の檜垣。

砂季N「初めてその男性ひとに出会ったのは、大
学四年の春でした」

教壇に立つ檜垣。

背後の黒板に『西洋彫刻史』

砂季の顔。

砂季N『どこかで会ったことがある……』と
私は思わず心の中で呟いていました。もち
ろん、現実に出会ったことがあるはずはあり
ません。前世の記憶とでもいうのでしう

か。遙か遠い昔——私がこの世に生まれるよりもずっと前から知っているかのような、不思議な懐かしさが胸の内に広がるのを感じたのです」

スケッチブックに檜垣を描き始める砂季。砂季N「気がつくど、私はその男性ひとの姿をスケッチブックに描き出していました。自分でも不思議なくらいの衝動に突き動かされて、私は講義の間じゅう夢中になって描き続けたのです」

授業の終わりを告げるチャイムの音。

ふっと描く手を止める砂季。

スケッチブックの中の檜垣。

砂季N「初対面の人にあんなに強い感情を抱いたのは、生まれて初めてのことでした」

○ 同（時間経過）

窓から若葉の木々が見える。

教壇に立つ檜垣。

ノートに書き記す砂季。

砂季N「それから三ヶ月の間、私は休むことなく講義に通い続けました」

○ 同（時間経過）

窓から雨に打たれる木々の葉が見える。

教壇に立つ檜垣。

講義に聞き入る砂季。

砂季N「初めて会ったときに感じた、何とも言えない懐かしさは、その後も講義を受けるたびに感じていましたが、恋の対象として見ることはありませんでした。その男性がひと回り近く年上に見えたことも一因だったかもしれません。とにかく私は、週に一度、その声を聴き、その姿を見ているだけで十分だったのです」

○ 同（時間経過）

窓の外に青空が広がり陽射しが強い。

蝉しぐれ。

教壇を下りて教室を出て行く檜垣。

スケッチブックの中の檜垣を見つめている砂季。

少し間。

スケッチブックをパタンと閉じる。

席から立ち上がり、教室を出て行く。

砂季N「確かに、鮮烈な出来事ではあったけれど、時の経過とともに、私の心の中で風化してゆく思い出の一つにすぎなかったのです」

○ レストラン・店内（昼）

ドアを開けて中に入ってくる砂季。

砂季N「それから三年後、まさかその男性ひとが

私の前に現われようとは——」

×

×

×

先に来ている透子が砂季に「こちらよ」と合図をするように手を振って立ち上がる。

砂季に背を向けて座っていた檜垣が立ち

上がって振り向いて会釈する。

×

×

×

砂季N「しかも、姉の婚約者として現れよう

とは——」

砂季「!…… (一瞬立ちすくむ)」

砂季N「まったく思いもよらぬことでした」

テーブルにつく砂季。

檜垣「(立ったまま) 初めまして。檜垣と申し

ます」

砂季「……初めまして。妹の砂季です」

檜垣「砂季さんの大学で講座を持ったことが

あるんだけど、西洋彫刻史ってとったこと

ないですか？」

砂季「西洋彫刻史……いえ、とっていないで

す……」

檜垣「そうですか……。でも、もしかしたら構

内ですれ違っていたかもしれないですね」

砂季「…ええ…そうかもしれないですね…」

グラスの水を飲む砂季。

砂季N「思いもよらぬ再会に動揺しているだ

けだと思いたかったけれど——」

○ 走る車（日替り・昼）

運転している檜垣。

後部座席に座る透子と砂季。

バックミラーに映る檜垣にちらりと目をやる砂季。

砂季 N 「檜垣さんに対する気持ちは、やはり恋と呼べるものでした」

○ アートホール・中

「○○絵画展」の看板。

檜垣、透子、砂季が鑑賞している。

透子と並んで観ている檜垣をそっと見る砂季。

砂季 N 「でも、私はすぐに自分の気持ちを打ち消しました。姉の夫となる人に、単なる身内としての好意以上のものを抱くことはあってはならない——感情の趣くままに流されてはならないと自分を戒めるものが私

の心の中にあつたのです」

○ 砂季の部屋

本棚の前でスケッチブックを開いて立っている砂季。

檜垣のデッサン画を見ている。

砂季 N 「それでも、あのスケッチブックだけは、最後までどうしても捨て切れませんでした」

スケッチブックをパタンと閉じて本棚の隅に仕舞う砂季。

砂季 N 「もう、あのと時のことを誰かに話すことはないのだ、話してはならないのだと、ふと思うとき、わずかな未練が私の心を過ぎったのです」

○ 教会・中

祭壇の牧師の前に檜垣と透子が向き合っている。

牧師 「檜垣成志、あなたはこの女性を正式な

妻とし、今日より先、生涯愛し続けることを誓いますか？」

檜垣「誓います」

檜垣と透子を見つめる砂季の顔。

膝の上で重ねた両手にぐっと力が入る。

涙が一筋頬をつ——と流れ落ちる。

砂季N「こうして、思いがけない再会から一

カ月後、檜垣さんは姉の夫に、私は彼の義理の妹になったのです」

○ 車内（夜）

六月下旬の設定なので午後七時近くても、まだ空は明るい。

窓に頭を持たせかけ、穏やかな表情の砂季。息は絶えている。

救急車が到着し、騒々しい雰囲気の中。

○ 病院・透子の病室（夜）

目を閉じてベッドに横たわっている透子。窓際に設置されたベッド。

窓の外に夜景が広がる。

ベッド横のカーテンが引かれ、病室のドア付近は見えない。

× × ×
ドア付近で。

靖夫「砂季の通夜は明日の六時に決まりました」

檜垣「そうですか……。でも、申し訳ないんですが、欠席させてもらいます。透子の意識が戻るまでは、やつぱりどうしてもここを離れたくないんです。目が覚めたときにそばにいてやりたいんです」

靖夫「すまないね…成志くん…。じゃ、砂季の葬式が終わるまで宜しく頼みます（一礼して）」

檜垣「はい……」

出て行く靖夫。

見送る檜垣。

× × ×
カーテンを開け、ベッドに歩み寄る檜垣。

目を閉じて横たわっている透子。

椅子に座り、透子の手をそつと握る。

檜垣「——透子……、急がなくてもいいけど、
必ず……必ず目を覚ましてくれよ。僕はこ
こにいるから」

○ 同・透子の病室（朝）

ブラインドの隙間からこぼれてくる朝陽。

その光で目を覚ます檜垣。

透子の顔を見つめる。

○ 同・自販機前

缶コーヒ―を買う檜垣。

○ 同・透子の病室

入ってくる檜垣。

ベッドの上の透子、ぼんやりと天井を見
つめている。

檜垣「透子……?!」

ベッドに駆け寄る檜垣。

天井を見つめたままの透子。

透子の手をそつと握りながら、

檜垣「透子……わかるかい？」

檜垣を虚ろな目で黙ったまま見つめる透子。

透子「あの……あなたは……？」

檜垣「！……僕だよ、成志だよ」

透子「(怪訝そうに) 成志……？」

檜垣「(うなずく) きみの夫だ」

透子「夫？」

透子「——そうだよ」

透子「?……」

檜垣「とりあえず、先生に知らせてくるから」

呆然として出て行く檜垣。

○ 同・透子の部屋・外

出てくる檜垣。

ドアにもたれかかる。

○ 同・面談室(昼)

檜垣、透子の父・靖夫、母・湘子と医師がテーブルについている。

脳のMRI写真がボードに貼られている。

靖夫「逆行性健忘症……？」

医師「ええ。お嬢様は事故以前の記憶を失っているものと思われまます」

湘子「でも、事故直後の画像には特に異常はなかったと言われましたけど……」

医師「ええ。その場合でも、時間の経過とともに異変が画像に現れてくる場合もあるんです。ですから、今後定期的に検査していく必要があります」

檜垣「でも何故、妻は私のことだけを覚えていないのでしょうか？ 両親も妹も友人も会社の同僚のことも覚えていてるのに、なぜ私だけを……？」

医師「脳に損傷を受けた時点から遡って、古い情報よりも新しい情報の方が記憶障害の度合いが強いという研究報告もあり、この種の症例では珍しいことではないんです。

……ご主人に限らず、この二、三ヶ月の間に初めて会った人のことは恐らく記憶にないと思います」

檜垣「どのくらいで記憶は戻るんですか？」

医師「今の段階では何とも言えません。人によつて数週間で戻る場合もあれば、何年もかかる場合も……」

檜垣「——一生戻らない場合もあると？」

医師「……（うなづく）」

○ 同・透子の病室（夜）

静かにドアを開けて入ってくる檜垣。

ベッド脇の椅子に座る。

眠っている透子。

医師の声「今のところ、有効な治療方法はなく、患者の記憶が自発的に戻るのをじっくりと待つしかありません」

間。

檜垣（透子に囁く）——焦らなくていい……。

無理して思い出そうとなんかしなくていい

……。記憶が戻っても……。戻らなくても……
僕はきみのそばにいるから」

○ 同・透子の病室（朝）

ベッドの上で起き上がろうとしている透子。

花を持って入ってくる檜垣。

透子が起き上がるのを手伝う。

○ 同・透子の病室（日替り・昼）

前の場面とは違う花が飾ってある。

ベッド脇に檜垣が座り、透子と話している。

医師が様子を見に入ってくる。

立ち上がって挨拶する檜垣。

○ 同・リハビリ室（日替り・昼）

透子のリハビリに付き添う檜垣。

○ 檜垣の家・アトリエ（日替り・夜）

彫像を一心に制作している檜垣。

○ 病院・透子の病室（日替り・昼）

ベッドに透子、そのまわりに透子の父・

靖夫、母・湘子、檜垣、医師。

医師「では、私はこれで」

それぞれに「有難うございました」
間。

靖夫「「退院後のことなんだが……」

檜垣「！……」

透子「！……」

靖夫「（檜垣に）気を悪くしないでほしいんだ
が……しばらく透子を実家に置いてはどう
だろうか？」

檜垣「！……」

靖夫「この通り、透子は夫である成志くん
のことを思い出せず、記憶がいつ戻るのか……
…そもそも戻ることの保証すらない状態だ。
それなのに夫だからといって、きみに負担
をかけてしまうのはどうかと思ってね……」

それに……、妻と言ったって、籍を入れて
まだ数日しか経っていなかったのだから」

檜垣「……」

靖夫から目を逸らし左手の結婚指輪をじ
つと見る。

○(回想)教会・中

牧師の前に立つ透子と檜垣。

牧師「あなたはこの女性を正式な妻とし、今
日より先、生涯愛し続けることを誓いま
すか」

檜垣「誓います」

○病院・透子の病室(昼)

顔を上げ、靖夫をまっすぐに見る檜垣。

檜垣「確かに法律上夫婦として生活したのは
数日だけです。出会ってからの期間だっ
て三ヶ月にもなりません。でも、僕にとつ
てそんなことは問題ではないんです」

湘子にも目を向ける。でも、透子とは目

を合わさない。

檜垣 「お義父さんとお義母さんがご心配なされる気持ちもよくわかります。でも、僕にはどうしても彼女が必要なんです。決して負担なんかじゃありません。記憶が戻らないのなら、戻らなくても構いません。彼女がもう一度、これからの人生を僕と過ごすことを決めるのに必要な時間なら、いくらだって待つつもりでいます。だけど、もし……」

透子にちらりと目をやる。

檜垣 「透子が僕と暮らしたくないと言うのなら、無理に連れて帰るつもりはありません。決めるのは彼女自身ですから。彼女が実家で過ごしたいと言うのなら……仕方ありません……彼女の意志を尊重します」

間。

靖夫に目を向ける透子。

目顔で「おまえの思う通りにしなさい」と促す靖夫。

窓の外に目をやる透子。

夏空に白い雲がぼつかりと浮かんでいる。

しばらくして、視線を室内に戻す透子。

檜垣と一瞬目が合うが、そのまま視線を

靖夫と湘子に移す。

透子「成志さんと帰ります」

黙ってうなづく靖夫。

透子「(檜垣に一礼して) よろしくお願ひします」

檜垣「(うなづく)」

ほっとした表情の檜垣。

○ 檜垣の家・寝室 (日替り・朝)

ベッドが二つ並んでいる。

そのうちの一つを部屋の外へ運び出そう

としている檜垣。

○ 同・リビング(夜)

飾ってある写真立てを手に取る檜垣。

結婚式での透子と檜垣が写っている。

じつと見る檜垣。
写真立てを手に持ったまま、ダイニング
キッチンへ向かう。

○ 同・ダイニングキッチン（夜）

カウンターに置かれた、二人が写っている
写真立てを手に取る檜垣。

○ 同・寝室（夜）

ベッドが一つになっている。
チェストに置かれた、二人が写っている
写真立てを手に取る檜垣。

○ 同・書斎（夜）

少し狭い部屋にベッド一つと机とチェス
トがある。
机の抽斗に、他の部屋から集めてきた写
真立てを仕舞う檜垣。

○ 檜垣の家・表（日替り・昼）

車が停まる。

檜垣と透子が下りてくる。

荷物を持った檜垣が先に立ち、玄関へ向かう。

○ 同・玄関・中

ドアが開き、先に透子の中に通す檜垣。

透子、中に入る。

○ 同・透子の寝室

透子を案内しながら荷物を運び入れる檜垣。

○ 同・リビング（夜）

ソファに座っている檜垣。

入ってくる透子（風呂から上がり着替えている）。

透子「じゃ、お先に失礼します」

檜垣「うん……。ゆっくり休んで」

透子「はい……。じゃ、おやすみなさい」

檜垣「おやすみ」

寝室へ向かう透子。

透子の後ろ姿を目で追う檜垣。

透子の寝室のドアが閉まった後もそのドアを見続ける。

○ 透子の夢の中

漆黒の闇の彼方から白い光が差し込んでくる。

何物かが目の前を横切る。

次第にアゲハ蝶であるとわかる。

捕まえようと伸ばしている透子の手。

あと少しで届くという時、アゲハ蝶が砂季の姿にすり替わる。

穏やかな、でもどこか寂しげな微笑を浮かべている砂季。

砂季が光の穴の中へすうっと消えていく。

○ 透子の寝室（夜）

テーブルに常夜灯が点いている。

ベッドの上でうなされている透子。

○ リビング

ソファに座っている檜垣。

透子の寝室から、うなされている声が洩れ聞こえてくる。

檜垣「！」

飲みかけのグラスをテーブルに置き、立ち上がる。

透子の寝室の前に立つ。

中の物音に耳を澄ます。

一瞬ためらった後、ドアを静かに開ける。

○ 透子の寝室

静かに入ってくる檜垣。

ベッドの傍に歩み寄り、床に跪いて透子の寝顔を覗き込む。

うなされている透子。

透子の額にかかった前髪をそっと払う檜垣。

檜垣「(透子の肩に手をかけて)透子……透子

……(と揺り起こす)」

ハッと目を開ける透子。

檜垣「大丈夫か？随分うなされていたみたい
だけど」

一瞬目を睜り、あわててベッドの上で体
を起こす透子。

額の汗を拭い、上掛けをそっと引き上げ
る。

立ち上がる檜垣。

檜垣「悪い夢でも見た？」

透子「……そうみたい……」

肩で大きく息をつく透子。

檜垣「どんな夢だった？」

透子「……(少し遠くを見る目をして考え込
む表情)」

少し間。

檜垣「水、持ってこようか？」

透子「ううん、大丈夫。ありがとう」

檜垣「じゃ、行くよ」

背を向け、部屋から出て行こうとドアの
前に立つ檜垣。

透子「成志さん……」

檜垣「ん？」

ドアの前でゆっくり振り向く檜垣。

透子「ありがとうございます……来てくれて」

檜垣「(うなづく)」

透子に少し視線を置いてから、部屋を出
て行く檜垣。

見送る透子。

○ 檜垣の書斎(朝)

ベッドの上で目を覚ます檜垣。

ドアの向こうから物音が聞こえてくる。

ベッドから下り、出て行く檜垣。

○ ダイニングキッチン

朝食の準備をしている透子。

透子「檜垣に気づき(おはよう)ございます」

檜垣「おはよう……」

透子「勝手に冷蔵庫の中の材料や鍋とか使わせてもらいました。パンがないようなのでご飯にしましたんですけど……」

檜垣「ありがとう……」

透子「着替えてきてください。あと少しで出来上がりますから」

檜垣「うん……」

×

×

×

テーブルにしている二人。

檜垣「いただきます」

透子「どうぞ……」

檜垣「(お味噌汁を啜って) うん、美味しい」

透子「(笑顔) よかった……」

それとなく透子を観察する檜垣。

○ リビング

出かける準備をして書斎から出てくる檜垣。

ダイニングキッチンを見ても透子がない。い。

檜垣「?……」

○ 一階・廊下

階段を下りてくる檜垣。

アトリエのドアが少し開いている。

ドアの前を通り過ぎる時、物音が聞こえる。

ドアを開けて、アトリエを覗く檜垣。

○ 一階・アトリエ

床を掃除している透子。

入ってくる檜垣。

檜垣「掃除なんか、しなくていいよ……。どうせすぐ汚れてしまうから。退院したばかりなんだから、ゆっくりして……」

透子「ありがとう……。でも、体はもう大丈夫だから。(軽い感じで)頭はまだ元に戻らないけど」

檜垣「……じゃ、あんまり無理しないで」

透子「はい」

○ 玄関・中

靴を履いて振り向く檜垣。

見送りに来ている透子。

檜垣 「じゃ、行ってきます」

透子 「いってらっしゃい」

ドアを開けて出て行く檜垣。

見送る透子。

○ ダイニングキッチン（夜）

料理をしている透子。

○ リビング

ソファに座って新聞を広げ、それとなく

透子を見ている檜垣。

○ バスルーム（日替り・昼）

掃除をしている透子。

○ ダイニングキッチン（日替り・昼）

食器棚の皿をテーブルに出して、棚の中の掃除をしている透子。

○ 一階・アトリエ（夕方）

作品の制作をしている檜垣。庭からホースで水をまいている音が聞こえる。

庭に面した窓辺に歩み寄り、カーテン越しに透子を見守る檜垣。

○ 庭（夕方）

薔薇などにホースで水遣りをしている透子。

水を止め、はさみで薔薇の剪定をして、伸びた枝を紐でしばっている。

○ リビング（夜）

ソファに座ってテレビを見ている檜垣と透子。

檜垣の横顔をそっと見る透子。

透子「明日、砂季のお墓参りに行こうと思う
んだけど……」

檜垣「明日……？（壁のカレンダーを見る）そ
うか……明日は砂季ちゃんの月命日か……」

透子「ええ……」

檜垣「僕も行くよ。暑いから車で行こう」

透子「ありがとう。でも、一人で大丈夫よ。電
車の乗り方だって、道順だって、わかる

（もの……と言いかけて口をつぐむ）……

ごめんなさい」

檜垣「いや……謝ることないよ。無理して思
い出そうとしなくていいんだよ。……僕に
は過ぎ去った思い出より、透子とこうして
いる時間の方が大事なんだから」

透子「……ありがとう」

○ 玄関・中（朝）

透子「じゃ、行ってきます」

檜垣「気をつけて」

ドアを開けて出て行く透子。

ドアを開けたまま見送る檜垣。
門の外へ透子が出て行くのを見届けてか
らドアを閉める。
急いで中へ引き返す。

○ リビング

服を着替えて書斎からあわただしく出て
くる檜垣。
窓の鍵を閉め出て行く。

○ 玄関・外

ドアを開け、出てくる檜垣。
鍵を閉め、門の外へ出て行く。

○ 道

前方に透子の姿はない。
時計を見ながら走る檜垣。

○ 駅前の横断歩道

夏のカラフルな色合いの人々の中を黒の

ワンピースを着た透子が歩いている。

×

×

×

離れた所から透子の後ろ姿を見つける檜垣。

○ 駅前の花屋

店先に並ぶ色とりどりの花。

白い百合（カサブランカ）を指差して店員に話しかけている透子。

×

×

×

離れた所から透子の様子を見守る檜垣。

○ 駅・改札口

百合の花束を抱えて改札を通っていく透子。

少し遅れて改札を通る檜垣。

○ 電車・車内

平日の午前、人影まばら。

隣りの車両から透子の様子をちらちらと

見る檜垣。

窓の外をぼんやり眺めている透子。

○ 寺・入口

青空が広がり、陽射しが強い。

蝉しぐれ。

中に入っていく透子。

手桶に水を汲みにいく。

その間に先に墓地に入っていく檜垣。

○ 寺・墓地

奥まった所に隠れるようにして立っている檜垣。

透子が入ってくる。

お墓の前で立ち止まる。

百合の花を供え、線香に火を灯し、両手を合わせる。

その両手を地面につき、膝をつく。

声を押し殺して泣き始める。

透子「砂季……ごめんなさい……許して……」

檜垣「！（声は聞こえないが、透子の姿を見て）」

足を一步步み出したものの、そのまま立ち尽くして、じつと透子を見守る檜垣。

○ 檜垣の家・玄関・中（夜）

玄関のチャイムが鳴り、透子が出てきてドアを開ける。

檜垣が立っている。

透子「お帰りなさい」

檜垣「ただいま……（後ろから白いカラーの

花束を透子に差し出す）」

透子「！……どうしたの、これ……」

檜垣「いや、別に……たまにはいいかなと思

って」

透子「（受け取りながら）ありがとう……」

檜垣「（中に入りながら）無事にお墓参りに行

けた？」

透子「ええ」

檜垣「よかった」

透子「(先に入っていく檜垣の背中に)ごめんなさい。……車で行こうって誘ってくれたのに断ってしまった」

檜垣「いや、いいよ……そんなこと気にしなくていいよ」

先に廊下をいく檜垣。

見送る透子。カラーに目をやり溜め息をつく。

○リビング(夜)

ソファに座って本を読んでいる透子。

少し離れて座って新聞を読んでいる檜垣。

ステレオから音楽が流れている。

しばらくして、二人で初めて海へ行った

帰りの車の中で聴いた曲が流れる。

新聞を折りたたみ、立ち上がる檜垣。

ステレオのボリュームを上げる。

透子の傍に歩み寄り、手を差し出す。

檜垣「踊っていただけますか？」

透子「!……」

戸惑っている透子の手を取って立ち上がらせる檜垣。

音楽に合わせて体を揺らし始める。

しばらくして、透子をそっと引き寄せ、
目を閉じて檜垣の旨に頭をもたせかける
透子。

間。

砂季の声「お姉ちゃん……」

透子にだけ砂季の声が聞こえる。

透子「！（はっと目を見開く）」

透子の視線の先に、暗がり立つ砂季が見える。

穏やかな、でもどこか寂しげな微笑を浮かべている砂季の顔。

檜垣の腕の中から体を咄嗟に引き離す透子。

檜垣「！……透子……？」

透子「……（檜垣の肩先を呆然と見つめている）」

透子の肩に手をかけようとする檜垣。

と、弾かれたように後ずさる透子。

透子の顔を探る檜垣。

間。

透子「(檜垣の目を見て) ……ごめんなさい」
くるりと背を向け、寝室に消えていく透子。

その場を動けず、透子の後ろ姿を見つめる檜垣。

ドアを閉める音が静まりかえった部屋に響く。

閉まったドアをなおも見続ける檜垣。

○ 透子の寝室

灯りをつけずベッドに腕を抱くようにして体を丸めて横たわっている透子。

暗がりに目を凝らしている。

しばらくして目を閉じる。

○ (回想) リビング

檜垣の腕の中にいたとき、

砂季の声「お姉ちゃん」

透子の視線の先に砂季が立っている。

○ 透子の寝室

ベッドの上に起き上がり、膝を丸めるようにして座る透子。

腕をさすりながら目の先の闇を見つめている。

ベッドから足を下ろし、ナイトテーブルの抽斗を開け、日記を取り出して膝の上に置く。

日記の表紙。

○ 檜垣の書斎（朝）

ベッドで目を覚ます檜垣。

時計を見る。九時を少し過ぎている。

耳を澄ませてリビングの様子を窺う。

窓の外の鳥のさえずりが聞こえてくるだけ、家の中の物音が聞こえない。

ベッドの上でがばっと起き上がる。

○ リビング

書斎のドアからあわてて出てくる檜垣。

カーテンは開けられ、窓から朝陽が差し込んでいる。

が、透子の姿はない。

ダイニングテーブルに目をやる。

一枚の紙が置いてある。

テーブルに歩み寄り、紙を手取る。

透子の声「おはようございます。ちょっと出かけてきます。夕方には帰ります」

紙を持ったまま、リビングのソファに向かう檜垣。

透子の寝室の前を通りかけ、ドアが十センチほど開いていることに気づく。

立ち止まり、ドアの隙間から中を覗く。

少しためらってから、手でそっと扉を押し開ける。

○ 透子の寝室

入ってくる檜垣。

二、三步入って立ち止まる。

○ フラッシュバック

・アトリエでテーブルに原稿を差し出して話す透子。

・プロポーズをする透子。その透子を抱き上げる檜垣。

・ウエディングドレス姿でヴァージンロードを歩いてくる透子。

・ベッドで横になりながら話をする透子と檜垣。

○ 透子の寝室

ベッドに歩み寄り、腰を下ろす檜垣。

ベッドの上に仰向けになる。

部屋の中を眺め回す。

起き上がり、立ち上がるうとした時、ナイトテーブルが目に入る。

抽斗が少し開いているのに気づく。

檜垣「……」

抽斗をゆっくり開ける。

ハードカバーの本の下に日記があるのを見つける。

日記を取り出し、膝の上に置く。

檜垣「……」

× × ×

〈フラッシュ・回想〉

踊っている途中、突然体を離し、「ごめん
んなさい」と言って去っていく透子。

× × ×

少し間。

日記を開く檜垣。

檜垣「!……」

透子N「成志さんとの過去も未来も消して、
砂季に償うと決めたはずなのに、私はいっ
たい何をやっているんだろう……。罪を償
うなんて言っておきながら、砂季のことも
忘れて、成志さんの腕の中で身を任せきつ

ていたなんて……。砂季、ごめんなさい」

顔を上げてぼんやりと宙を見つめる檜垣。

檜垣「(呟く) 過去も未来も消して……。罪を償
う……。？」

少し間。

檜垣「！……。 (呟く) 透子が記憶喪失の振りを
している……。？」

○ 檜垣の家・前の道 (夕方)

ゆっくりと歩いてくる透子。

背後に夕空が広がっている。

門の前で家を見上げる。

覚悟を決めた表情で門を開け、中へ入っ
ていく。

○ 同・アトリエ

部屋に音楽 (チェロの曲など) が流れて
いる (そのため、門を開ける音に気づか
ない)。

椅子に座って考え込んでいる檜垣。

玄関のチャイムが聞こえる。
立ち上がり、急いで部屋を出ていく檜垣。

○ 同・玄関・中

ドアを開ける檜垣。

中に入る透子。

檜垣「お帰り……」

透子「ただいま」

檜垣と目を合わせるもの、すぐに逸らす

透子、先に上がって廊下を歩いていく。

透子の後ろ姿を見つめる檜垣。

○ 同・ダイニングキッチン（夜）

食事の後片付けをしている透子。

○ 同・リビング

窓の外、雨が降り始める。

窓辺に向かい、窓を閉める檜垣。

○ 同・ダイニングキッチン

テーブルのそばに立つ透子。

透子「成志さん……お話したいことがあるんですけど……」

○ 同・リビング

檜垣「（振り向いて）何かな……？」

ゆつくりダイニングテーブルに向かう。

○ 同・ダイニングキッチン

テーブルにつく透子。

前に座る檜垣。

手にしていた離婚届をテーブルの上に広げて、檜垣の前に差し出す透子。

半分は透子の字で埋められている。

檜垣「！……」

透子「成志さん……」

檜垣「……」

透子「離婚してください」

檜垣「！——」

透子「退院してからずっと、成志さんには本

当によくして頂いて、感謝しています。でも、もう三ヶ月も経つのに、未だにあなたのことが思い出せないんです。このまま一緒に暮らしたとしても、思い出せるかどうか……。だから、成志さんも、もう私のことは忘れて、新たな人生を歩んでください」

檜垣「――」

透子「成志さんには本当に感謝しています。記憶のない私を一度も責めることなく、ずっと優しく見守ってきてくれて……。あなたと結婚できて本当に幸せでした。有難うございました」

立ち上がって寝室へ向かう透子。

檜垣の横を通りかけたとき、思わず強く

透子の腕を掴む檜垣。

咄嗟に振りほどこうとする透子。

檜垣「どうして一人で勝手に決めるんだ」

透子「!……」

立ち上がって透子の腕に手をかけ、透子と向き合う檜垣。

檜垣「どうしてそんなに一人で抱え込むんだ」

透子「……（檜垣を見上げる）」

少し間。

透子「だって……あなたのことをどうしても
思い出せないから……。あなたとどんな風
に出逢って……どんな風に結婚したのかも覚
えていないのよ。他のことなら覚えている
のに……。どうしてもあなたのことだけは思
い出せないのよ……」

全身から力が抜けたように膝をつき、頭
を下げる透子。

透子「だからあなたも、もう私のことは忘れ
て……お願いだから……私と別れてくださ
い」

ひざまずき透子を抱き寄せる檜垣。

反射的に檜垣の腕から逃れようとする透
子。

檜垣「（透子を抱いたまま）もういい……もう
やめていいよ。砂季ちゃんだってきっと許
してくれるよ……」

ピタリと動きを止める透子。

ゆっくりと体を離し、檜垣をまっすぐに
見つめる。

檜垣「ごめん……。今日、透子が出かけている
間に、日記、読んでしまったんだ……。ごめ
ん、勝手に読んで……」

少し間。

透子「(首を振る) 謝るのは私の方よ。あなた
を騙していたんだから」

檜垣「日記を読んでから、どうやってきみに
切り出そうかって、ずっと考えていた。い
つまでも記憶喪失の振りなんか続けさせる
わけにはいかないって……。でも、きみの
ことだから、僕が本当のことを知ったとな
れば、なおさら僕と一緒にいられなくなり、
僕の前から姿を消してしまうのだろうと思
うと、怖くてなかなか言い出せなかった…
…」

透子「——」

立ち上がり、寢室に向かう透子。

檜垣「!……(透子を目で追う)」

立ち上がり「透子……?」と呼び止める

檜垣。

ドアを開けたまま、寝室に入っていく透子。

檜垣「?……」

○ 透子の寝室

入ってくる透子。

灯をつけ、チェストに歩み寄る。

抽斗から、砂季のスケッチブックを取り出す。

○ リビング

スケッチブックを手にして入ってくる透

子、檜垣の前に立ち、開いて差し出す。

檜垣「!……」

○ スケッチブック

檜垣を描いたデッサン画。

右下に「2003年4月14日 西洋彫
刻史の講義にて」の文字。

○ リビング

デッサン画に見入る檜垣。

× × ×

〈フラッシュ・回想〉

レストランで。

檜垣「砂季さんの大学で講座を持ったことがあるんだけど、西洋彫刻史ってとったことないですか？」

砂季「西洋彫刻史……いえ、とっていないです……」

× × ×

檜垣「!……!」

透子、黙ったまま頁をめくる。

○ スケッチブック

デッサン画の裏。砂季の字で記されている。

砂季N「あんなに心の揺れを感じた男性は初めてだった。あの頃はそれが恋だなんて気がつかなかったけれど。でも、この気持ちは胸の内に一生仕舞っておきます。姉の夫となる人なのだから」

○ リビング

スケッチブックに見入る檜垣。

檜垣「!……!」

間。

透子の顔を見る檜垣。

透子「砂季の気持ちも知らずに成志さんと結婚したうえに、砂季の命まで奪ってしまったというのに、あなたの妻でいつづけることなんてできない。だから、もうわたしのことは忘れて、新しい人生を歩んでほしいの」

檜垣「新しい人生だなんて……君がいなければ意味がない」

透子「——」

檜垣「僕はこれからも、透子と一緒に生きていきたいと思っている。君は僕との過去も未来も消そうとしたけれど、僕にはできないよ……そんなこと」

透子「……」

檜垣「でも、透子が砂季ちゃんに対する罪の意識から、そうやって償おうとした気持ちも分からないわけじゃない。だから、僕にも背負わせてほしい。悩んでいたり辛いことがあるのなら、一人で抱え込まないで僕に言ってほしい。時間が必要なら、いくらだって待つ。だけど、もし……」

少し間。

檜垣「もし透子が、砂季ちゃんのことを抜きにしても、僕との人生を望んでいないと言うのなら……僕は君の前から姿を消すよ」

檜垣を見つめたまま、嗚咽を堪えるようにして泣き出す透子。

透子をそっと抱き寄せる檜垣。

激しく泣き始める透子。

強く抱きしめる檜垣。
窓の外の雨の音。

○ 同・リビング（日替り・朝）

ソファに座って新聞を読んでいる檜垣。
キッチンからソファに向かう透子。

テロップ『一カ月後』

檜垣の隣に座り、コーヒーを飲む透子。
新聞から目を逸らし、透子をちらりと見る檜垣。

新聞をたたんでテーブルに置く。

檜垣「見せたいものがあるんだけど……」

透子「?……」

檜垣「(思い出した?)という表情を浮かべ)いや、一緒に見たいものが」

透子の手を取り、立ち上がる檜垣。

○ アトリエ・ドアの外

ドアを開けて透子の中へ通す檜垣。

○ アトリエ・中

入ってくる透子と檜垣。

アトリエの中央に白い布が被せられた彫像が立っている。

檜垣が近づき、布を取る。

透子が依頼していた作品。

透子「！……」

ゆっくりと彫像に近づく透子。

彫像の前に置かれたプレートに目をやる。

『僕の愛しい人だから——檜垣成志』と

描かれたプレート。

透子「……（透子の目から涙が一筋つ——と

流れ落ちる）」

後ろから檜垣が透子の体に腕を回す。

檜垣「あの本の主人公が心の中に棲む女性を
想いながら作品を創っていたように、僕は
きみを想いながらこれを創っていた」

檜垣の手に自分の手を重ね、檜垣の顔を

見上げる透子。

照れくさそうに視線を逸らしてから、透

子の目を見て、

檜垣「僕にとっては、きみが愛しい人だから」

終